

〈原著論文〉

小学校特別活動の児童会活動における環境教育の取組 ——幼保小連携を意識した指導の提案——

仲 井 勝 巳

抄 録

本研究は、旧学習指導要領（平成20年告示）の特別活動における実践である。児童会活動の美化栽培委員会における環境教育の取組に関して、現行の学習指導要領（平成29年告示）に則って整理し、幼保小連携の指導について提案した。各学期に目標を設定し、児童が常時活動を通し、集団や自己の生活上の課題で、どのような野菜を植えるか、学校や地域社会を緑豊かにするか、活動内容の不参加に関する課題を解決するかについて取り組んだ。児童の各学期の振り返りから、「活動内容の楽しさ」は6割程度、「活動内容の頑張り」は7割程度、「育てることの面白さ」は8割程度の有効的な回答結果を示し、教師の指導工夫が必要であることを指摘した。そして、高学年の特別活動における幼保小連携では、美化栽培委員会の活動で、学校で育てた野菜や花の種を地域の保育所、幼稚園、子ども園に配布すること、緑のカーテンなどの環境活動の機会を設けること、常時活動で地域の幼児との関わりを意識することの指導を提案した。

キーワード：小学校特別活動、委員会活動、環境教育、幼保小連携、指導の提案

1. はじめに

本研究は、小学校の特別活動における児童会活動（美化栽培委員会）の実践を振り返り、幼保小連携を意識した指導の提案をすることを目的としている。また、旧学習指導要領（平成20年告示）の基での実施であるため、現行の学習指導要領（平成29年告示）における特別活動の目標に則って整理する。そして、今後の展望として、その活動が幼保小連携において、どのように取り組むことができるのかを考察し、指導の提案を行う。

菅沼（2021）は、幼保小と小学校段階の接続箇所にあたる「生活科」において、接続を具体的にイメージするために幼児教育の領域「環境」に着目し、幼児教育と生活科で同じ教材を扱った場合の差を幼児教育と小学校教育の段差と考え、その差を円滑に接続する生活科授業を検討した事例

(しゃぼん玉遊び)を挙げている。そして、菅沼(2022)は、幼児教育と小学校教育で同様の教材(しゃぼん玉遊び)を扱った際、幼児教育での遊び経験が小学校教育での学びへ、拡大及び深化を具体的に明らかにした。生活科の教科書に着目すると、学校図書(2021)『みんなとまなぶ しょうがっこう せいかつ 上』では、「もうすぐ2年生」という単元において、1年生を振り返ったり、次年度に入学する1年生を招待したりする内容が掲載されている。同様に、東京書籍(2021)『どきどきわくわく あたらしい せいかつ 上』も、「もうすぐ2ねんせい」という単元において、新しい1年生を招待したり、招待したことを話し合ったり、1年間を振り返ったりする学習内容が紹介されている。これらの生活科の教科書から、次年度に入学する1年生、すなわち、幼稚園や保育園、子ども園など、地域社会に住んでいる幼児を対象に、学校を案内したり、教室を紹介したり、一緒に遊んだり活動したりして、地域との関わりを活かした授業において、幼保小連携の観点が含まれていることがわかる。よって、菅沼の実践や生活科の教科書から、小学校では低学年の生活科において、幼保小の連携による学習が工夫されていることがいえる。

小学校の生活科以外の場面で、中学年や高学年において、幼保小連携を意識した学校教育は考えられないのだろうか。小学校の高学年における特別活動に着目すると、仲井(2023)は、小学校の特別活動における理科クラブの実践で、理科特有の実験や観察を行う観点から、事前に高学年のクラブ長を集めて打ち合わせや予備実験を取り入れることで、安全・安心を意識し、異学年による協働学習の場面設定の工夫について紹介した。なお、現行の小学校学習指導要領(平成29年告示)における特別活動の目標は、次の通りである。

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

また、児童会活動の目標は、次の通りである。

異年齢の児童同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

そして、児童会活動の内容は、次の通りである。また、内容の取扱いにおいて、「児童会の計画や運営は、主として高学年の児童が行うこと。その際、学校の全児童が主体的に活動に参加できるものとなるよう配慮すること。」とある。

1の資質・能力を育成するため、学校の全児童をもって組織する児童会において、次の各活動を通して、それぞれの活動の意義及び活動を行う上で必要となることについて理解し、主体的に考えて実践できるよう指導する。

(1) 児童会の組織づくりと児童会活動の計画や運営

児童が主体的に組織をつくり、役割を分担し、計画を立て、学校生活の課題を見だし解決するために話し合い、合意形成を図り実践すること。

(2) 異年齢集団による交流

児童会が計画や運営を行う集会等の活動において、学年や学級が異なる児童と共に楽しく触れ合い、交流を図ること。

(3) 学校行事への協力

学校行事の特質に応じて、児童会の組織を活用して、計画の一部を担当したり、運営に協力したりすること。

以上のことを踏まえ、本研究では、旧学習指導要領（平成20年告示）の特別活動における児童会活動の実践内容を、現行の学習指導要領（平成29年告示）の特別活動（特に、児童会活動に着目して）の目標に照らし合わせ、幼保小連携の指導の在り方について整理し、提案していく。

2. 研究の方法

2013年度に実施した小学校の特別活動における児童会活動を整理する。実践校では、児童会活動は委員会活動に該当し、本研究では栽培委員会に着目する。実施手続きは、次の通りである。

期間：2013年4月～2014年3月（年間10回程度の時間数）

※休み時間の水やりなどの常時活動も含む。

対象：関西圏にあるA小学校5～6年生である。前期2013年4～9月では、5年生9名、6年生8名、計17名である。後期2013年10月～2014年3月では、5年生10名、6年生8名、計

18名である。

内容：前期と後期の初回時に、児童会（美化栽培委員会）は、児童が中心となって活動するため、担当教員は、「より良い学校になるにはどうすれば良いのか」を考えて取り組んでほしいことを伝え、自発的な行動ができるように指導を心がけた。活動内容は、野菜や花の栽培（水やり、草抜き等）の常時活動、緑の羽根募金があった。また、運動会や学習発表会などの行事に関する準備もあった。これは、学習指導要領の内容で、学校行事への協力の内容に含まれ、計画の一部を担当したり運営に協力したりすることに該当するといえる。そして、普段の活動報告を職員室前付近の廊下に掲示したり、前期・後期委員会の目標、活動内容、緑の羽根募金、みどりのカーテン等の成果を、児童朝会で委員長から報告したりした。また、異年齢集団による交流の観点から、基本的には委員長は6年生から1名を選出し、副委員長2名と書記2名（黒板1名・記録ノート1名）は6年生と5年生からそれぞれ1名を選出したことは、活動の意義及び活動を行う上で必要となることについて理解し、主体的に実践できるような仕組みとなると考えられる。そして、前期、後期において、栽培委員会の目標を委員長や副委員長が中心となって決めて、取り組むことになる。これは、児童会の組織づくりと児童会活動の計画や運営の観点から、児童が主体的に組織をつくり、役割を分担し、計画を立て、学校生活の課題を見いだし解決するために話し合い、合意形成を図り実践することになる。

方法：児童が取り組んだ内容の記録、アンケートの振り返りを基に、現行の学習指導要領（平成29年告示）を踏まえ考察していく。また、幼保小連携の観点から、指導の提案を行う。

倫理的配慮：関西圏にあるA小学校校長から許可を得て、倫理的配慮を行い実施した。

3. 結果と考察

前期の活動では、前期の委員長、副委員長、書記を選出し、委員長達が主となって、委員会活動に取り組んでいった。その際、前期の栽培委員会の目標『緑ゆたかな学校にする。学校の植物を大切に。学校をきれいにする。』を委員会のメンバーで設定した。教員側から、植えたいもの（いちご、トマト、きゅうり、ピーマン、にんにく、びわ、キャベツ、メロン、スイカ、ぶどう、いも、ブロッコリー等）を児童に確認した。常時活動、募金活動等に取組んでいくが、各曜日の休み時間にクラスごとにグループを設定した。委員会活動の際に、普段の振り返りを行った。また、適宜、スイカやミニトマトができたなら収穫し、児童に手渡した。基本的に、小学校では火の通ったものしか食べることができないため、生野菜などは、その場では食べさせず、収穫する際に、保護者に見せて調理してもらって食べるように伝えた。特に、夏のスイカやゴーヤ（図1）を収穫した時は、児童は達成感を得たようで素敵な笑顔を見せていた。また、収穫物は、タイミングが悪いとカラスな

どに食べられてしまうことがあるため、状況によって教員が早めに収穫することもあった。タカノツメに関しては、適宜収穫して、児童に与えることができたが、それをさわった手で目をこすると危ないので、取り扱いに注意した。緑の羽根募金の活動は、朝の登校時間にあいさつ運動とかねて募金箱を持って取り組んだ。ほかに、ゴーヤも植えていたので水やりを行い、緑のカーテンも実施した。児童は野菜などを収穫する喜びを胸に秘め、活動に対して意欲的であった。

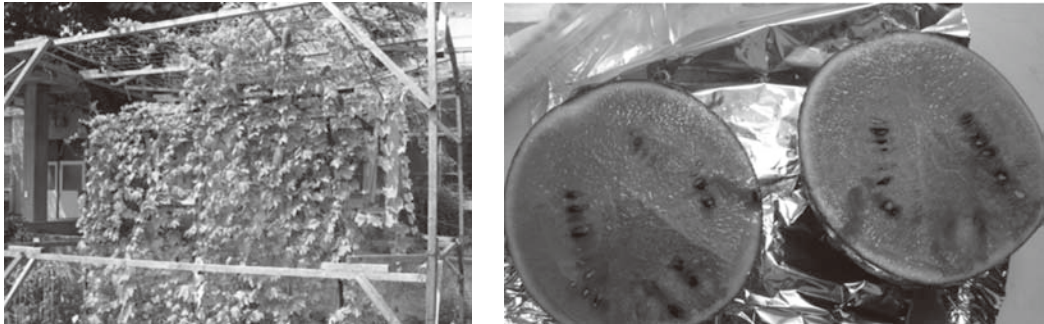


図1. 前期・美化栽培委員会の活動資料（緑のカーテンとスイカ）

後期の活動も同様に、委員長、副委員長、書記を選出し、委員長達が主となって、委員会活動に取り組んでいった。前期の目標を紹介した上で、後期の目標を『見てて気持ちがよくなるような自然あふれる学校にしよう。』と設定した。常時活動、募金の使い道等を考え活動に取り組んだ。秋から冬にかけて、野菜（スイカ、ゴーヤなど）がほとんど収穫できなかったが、タカノツメは12月頃まで収穫できた。タカノツメを米と一緒にしておくと虫に食べられないことを伝えると、児童はそうに役立つのかと理解する姿があった。草抜き等の活動後に、タカノツメを持って帰る姿を見ると、とても満足そうな顔をしていた。後期の活動は、前期の活動と比べ、作物があまり収穫できなかったため、児童にとって、タカノツメは日常生活に役立つという観点からも、動機付けに役立つと考えられる。筆者自身、タカノツメがこれほど委員会活動で役に立つとは思っていなかったもので、実施して良かったと判断している。1月頃には、チューリップの球根（図2）を委員会活動の時に協力して花壇に植えた。新入生が入学する春頃にチューリップの花が咲くことを知ると、児童は水やりなどの活動に意欲的に取り組む姿勢を見せた。



図2. 後期・美化栽培委員会の活動資料（チューリップの球根を花壇に植える）

前期・後期委員会の活動内容に関しては、委員会の掲示物（図3）で全校の児童へ知らせていた。例えば、児童会の代表委員会は、5～6年生のクラス代表と4年生のクラス代表（A小学校では、4年生はクラス代表のみ参加していた）から組織され、朝のあいさつ運動やユニセフ募金などの活動を高学年の児童と共に実施することを紹介していた。また、代表委員会で決めた全校児童の目標は、「みんなで仲よく協力して笑顔であいさつできる楽しい学校生活にしよう」としていた。兄弟学級に関しては、「1年生と6年生」、「2年生と4年生」、「3年生と5年生」の組み合わせで、学年間でなかよし給食（異学年で一緒に給食を食べること）や兄弟学級でのみんな遊びを上学年が考えて実施していた。各委員会活動を知って、特に高学年の児童が所属する委員会のみならず、全体の委員会の動きをつかみ、児童会で決めた目標を達成できるように取り組んでいた。そして、前期や後期の委員会報告が全校朝会などで行われ、各委員長が活動内容を伝えたり、活動に関して募金活動などへの協力を伝えたりして、全校児童が活動内容を知り、児童会の活動に取り組むような形になっていた。例えば、ユニセフの募金であれば、42070円の寄付金が集まったことを紹介している。そして、栽培委員会に関しても、活動した内容、話し合った内容、反省や今後の取組などをこの掲示物で情報を伝えている。ここで、1年間の栽培委員会に関する掲示物を整理し、表1にまとめた。表1から、前期・後期委員会について、委員長や副委員長が委員会メンバーに声をかけ、活動に取り組んだが、前期の常時活動（水やり・テラスのそうじ）の時にさぼってしまったという課題があり、協力的に取り組めなかったことがわかった。月に一度、委員会活動が実施されるため、その時に集まって活動する際は、5、6年生は協力して、草抜き、種まき、水やり、テラスの掃除などを取り組むことができていた。しかし、常時活動においては、前期では協力的に取り組めないことがあったため、後期では、5、6年生が一緒に取り組めるように掲示物でも常時活動の班分けを行った。その結果、さぼってしまう、忘れてしまう傾向が改善されていったと思われる。委員会活動においては、児童自身が課題を見つけ、その課題に対して話し合い、取り組む姿勢が重要とされる。協力して、畑を耕したり、種や球根を植えたり、水をやったり、草抜きをしたりすることで、前期や後

期に掲げた目標はある程度、達成していったと思われる。

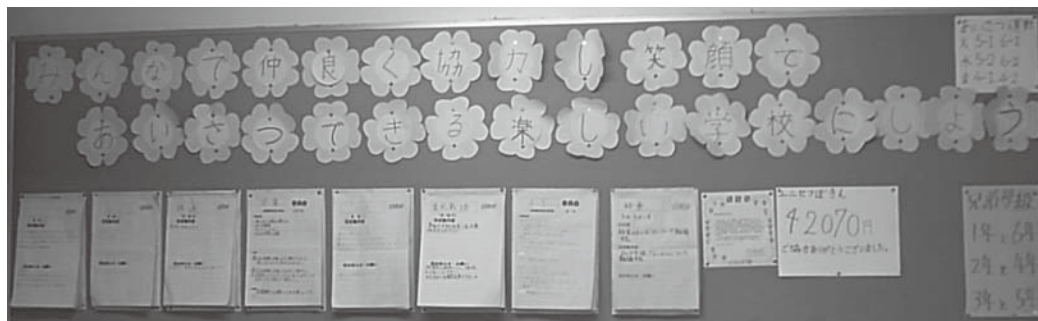
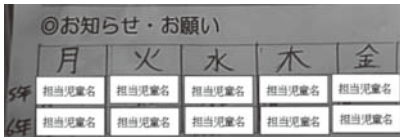


図3. 美化栽培委員会（他の委員会含む）の活動資料に関する掲示物

表1. 前期・後期美化栽培委員会の活動内容や全校児童へのお知らせに関する掲示資料

| 担当 | 実施日 | 委員会活動の内容・反省・振り返りなど | 全校児童へのお知らせ・お願いなど |
|---------|--------|---|--|
| 前期栽培委員会 | 4月15日 | 目標「学校の植物を大切に。緑ゆたかな学校にする。学校をきれいに。」いちご、トマト、きゅうり、ピーマン、にんにく、びわ、キャベツ、メロン、スイカ、ぶどう、いも、プロコリヤなどを植えようと考えています。（すべてではありません。）テラスのそうじと畑の水やり、ざっそうぬき。 | ゴーヤ、ひまわりを育てていきます。 |
| | 5月8日 | そうじをさぼらずがんばった。悪かったことは、さぼる日が多かった。 | 5月21日～5月24日に緑の羽根募金をします。よろしくお願いします。 |
| | 6月10日 | 普段の水やりをしっかりと。畑のそうじ、緑の羽根募金、ポスター作り。 | 緑の羽根募金、16794円集まりました。大阪の各地や〇〇小学校（実践校）で緑の活動に使います。ありがとうございます。 |
| | 7月1日 | 水やり、草ぬきをがんばる！ふだんの活動の反省では、草ぬきをして、ほとんどががんばった！ | 畑のスイカやミニトマトなどをまちがえてふまないでください。 |
| | 10月21日 | テラスのそうじ、水やり、緑の羽根募金、水やりやテラスそうじは1学期はできていたが2学期は忘れていたが多かった。緑の羽根募金で朝早く来てがんばれました。月曜日は、朝会などで時間がなく、そうじのやり残しがでたが、20分休けいなどでやりました。 | テラスそうじや水やりを続けてやってほしい。野菜や花などを大切に育ててほしい。 |
| 後期栽培委員会 | 10月28日 | 目標「見て気持ちがよくなるような自然あふれる学校にしよう」・テラスのそうじ。水やり。草ぬき。 | ※5年生と6年生が協力して常時活動（普段の水やり・テラス掃除）に取り組めるように、下記の活動表を作成し掲示した。  |
| | 12月2日 | 今後について、肥料やバンジー等がほしい。テラスのそうじはきちんとしている。 | 今、たくさん草や花を植えているので、学年園に入る時は注意してください。 |
| | 1月20日 | 緑の羽根募金で買った物の報告、いる物の話し合い | 花だんにチューリップを植えました。2月に入ったら、たねいもを植えます！！楽しみにしてください。すだちを日当たりのいい、チューリップの方に植えかえました。見てください。 |
| | 2月17日 | 種いも、新しい土を植える。半期分のふりかえりをした。何人かさぼってしまったが、ほとんどきちんとしてやっている。朝これない場合は、昼に来るなど工夫して仕事を。6年生が卒業しても、次の委員が決まるまで5年生で活動続ける。 | チューリップ、種いもを学年園に植えました。また、見に行ってみてください！！畑の中にチューリップなどを植えているので、ふまないで下さい。 |
| | 3月3日 | 畑、花だんのそうじ | 畑・花だんをきれいにしました。入らないでください。また、きれいな草花を見て下さい！！ |

次に、前期・後期の栽培委員会における児童の振り返りについて、それぞれの活動において、アンケートを実施して得た、回答結果から考察を行う。美化栽培委員会の仕事の取組に関して「仕事をがんばりましたか？」(5件法・自由記述)、「仕事は楽しかったですか？」(5件法・自由記述)、「野菜づくりはおもしろかったですか？」(5件法)、「次は、何を育てたいですか？」(選択・自由記述)、「栽培員会で、どのようなことを学びましたか？」(自由記述)、「栽培員会で、どんなことをすれば良くなると思いますか？」(自由記述)について、図4、図5、図6に整理し、各項目について考察していく。

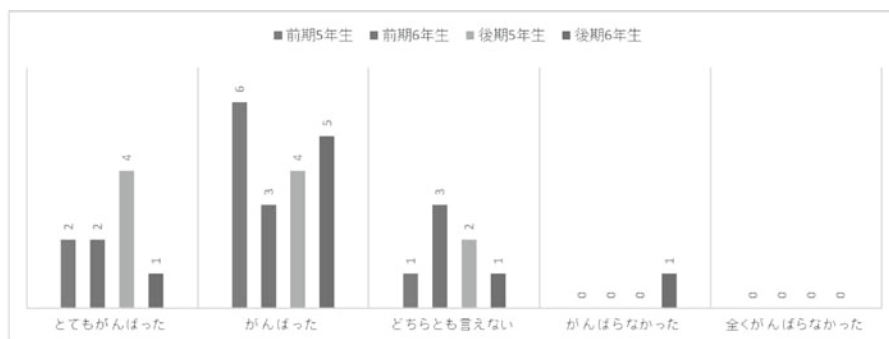


図4. 「仕事をがんばりましたか？」について

図4の「仕事をがんばりましたか？」について、「とてもがんばった」が9名(全体の26%)、「がんばった」が18名(全体の51%)の結果から、概ね頑張った傾向であることがわかった。「どちらとも言えない」が7名(全体の20%)、「がんばらなかった」が1名(全体の3%)いることから、活動をさぼってしまったり参加しなかったりした背景があると考えられる。そして、「どんなことをがんばったのか？」という自由記述の質問項目では、「・水やり・そうじ・草ぬき・落ち葉ひろい・緑の羽根募金の活動・副委員長の仕事・書記の仕事」とあり、実際の常時活動や委員会活動の日に集まって取り組んだ内容から、委員会で代表の立場にある児童の内容であることがわかった。

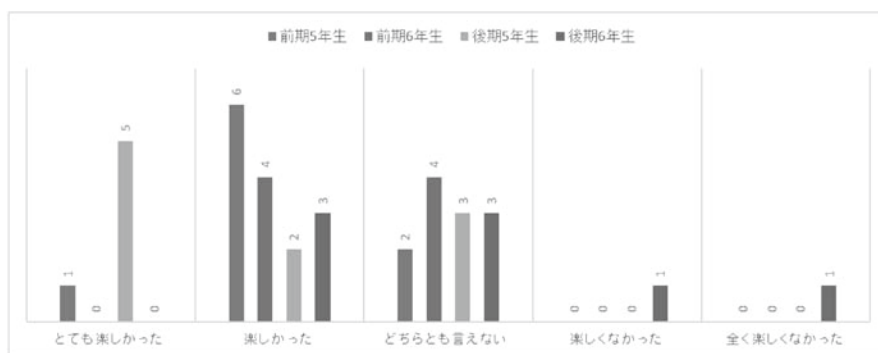


図5. 「美化栽培委員会の仕事は楽しかったですか？」について

図5の「美化栽培委員会の仕事は楽しかったですか?」について、「とても楽しかった」が6名(全体の17%),「楽しかった」が15名(全体の43%)の結果から、概ね楽しかった傾向であることがわかった。「どちらとも言えない」が12名(全体の34%),「楽しくなかった」が1名(全体の3%),「全く楽しくなかった」が1名(全体の3%)であることから、楽しく参加しなかった児童が一定数いることがわかった。その背景として、美化栽培委員会は、他の委員会活動と比べ、休み時間に活動があって自分の時間を使えなかったこと、畑やテラスなどの作業そのものが面白くないと思う児童がいたのではないかと推察される。そして、「どんなことが、楽しかったですか?」という自由記述の質問項目では、「・植物を植える時・水やり・友達と会話して畑作業・野菜を持って帰って食べること(スイカなど)・植物を自分らで育てたこと・野菜が大きくなったこと・落ち葉集め・花をきれいに植えること・野菜をとること・タカノツメをもらう・緑を増やす作業」とある。実際に植物を植え、水やりをして、自分達で育てて野菜を大きくしたこと、落ち葉を集めてきれいにしたこと、花や野菜(スイカやタカノツメなど)の収穫や、緑を増やす作業(緑の羽根募金)など、具体的な委員会の活動を書いており、このような振り返りの記述をした児童は、特に意欲的に取り組むことができたかと推察される。

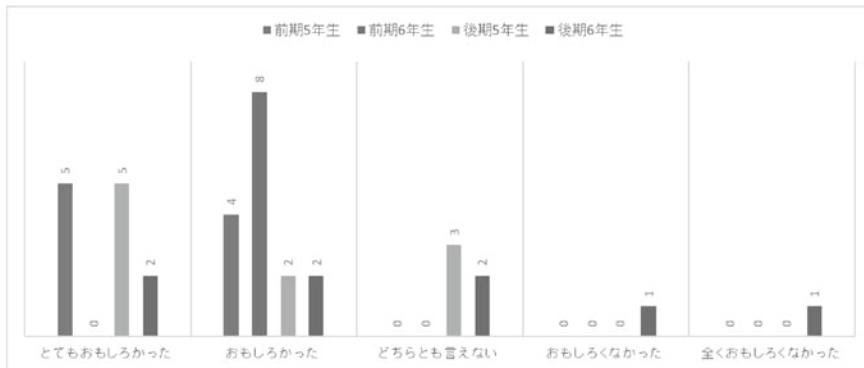


図6. 「野菜づくりや植物を育てることは、おもしろかったですか?」について

図6の「野菜づくりや植物を育てることは、おもしろかったですか?」について、「とてもおもしろかった」が12名(全体の34%),「おもしろかった」が16名(全体の46%)の結果から、概ね面白かった傾向であることがわかった。「どちらとも言えない」が5名(全体の14%),「おもしろくなかった」が1名(全体の3%),「全くおもしろくなかった」が1名(全体の3%)いることから、興味を示さない児童が一定数いることもわかった。この質問項目は、野菜や植物を育てる内容に特化した質問項目であるため、野菜や植物を育てること、すなわち、畑を耕したり、水やりをしたりすることに興味を持って取り組むことができなかったのではないかと推察される。特に、6年生にその傾向が見られることから、小学校の上学年(6年生)として、下学年(5年生)と協働的に仕事内容をこなすことができたのか疑問が残る。この傾向は、仕事の頑張りや楽しかったかと

いう項目についても、同様のことが考えられる。

さらに、「この委員会の仕事をして、どんなことを学びましたか？」では、「・植物の大切さを学んだ・植物や野菜は大事・きれいにすること・植物や野菜がどのように育つか・育てる大変さ・野菜はおいしい・こんな風に野菜が育っていくのを知った・野菜の栽培方法・水やりをしないと野菜はかれること・1月はとても落ち葉が落ちていたこと・花に水をやるのは、とても大切だということ・植物も生きているので、大事にしないといけない」とあり、植物や野菜、花の育て方、育っていく過程、水やりの大切さ、生命を大切にしようとする気持ちを持つことを学び、野菜などを食べることの興味を持つことがわかった。そして、「この委員会で、どんなことをすればもっと良くなると思いますか？」では、「・もっといろんな物を植える・植物を大切にすること・田んぼをつくる・もっと野菜を増やす・水やり・雑草をぬく・さぼらないこと・もう少し色々な所に花を植えればいいと思う・そうじをもっとする・スプリンクラーを買って水やりの手間を省く・もっとダメなところを話し合えば良いと思う」とあり、植物を増やしたり、水やりや雑草抜きをさぼらないようにしたり、委員会の児童同士で話し合うことの重要性を示している。

4. 総合考察と今後の展望

2013年度に実施した特別活動の児童会(美化栽培委員会)で、前期・後期の活動内容(活動記録)、指導者の視点、そして、児童の振り返りについて、現行の学習指導要領(平成29年告示)における目標と内容に照らし合わせて、整理する。

特別活動の目標が「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。」とあり、高学年の美化栽培委員会という集団の中で、前期・後期の委員長達が主となって、委員会の目標(前期:『緑ゆたかな学校にする。学校の植物を大切にすること。学校をきれいにすること。』・後期:『見てて気持ちがよくなるような自然あふれる学校にしよう。』)を設定し、常時活動(種まき、水やり、テラス掃除など)をして、集団や自己の生活上の課題(どんな野菜を植えるのかを考えたり、常時活動や緑の羽根募金活動を通して学校や地域社会が緑豊かにするという環境活動の意識を向上させたり、活動内容に参加できなかったという課題について話し合っ解決したりするなど。)に取り組んでいた。これは、資質・能力の(1)「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにすること。」ことや、(2)「集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにすること。」こと、そして、(3)「自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方につい

での考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。」に該当（主に該当する部分を筆者が下線した。）しながら育まれてきたのではないかと考えられる。

特に、児童が自治的に委員会活動に取り組むには、教師側の指導工夫が必要である。多様な他者と協働する様々な集団の中で、集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解するためには、児童の個々の考えを整理して指導することが重要である。今回の事例では、常時活動に取り組みなかった傾向のある児童に対して、休み時間の活用について、個々の活動を優先させた背景があると推察される。月に1回程度の委員会活動がある日では、委員長達が主となり、課題を整理し、その上で、解決策（例えば、後期では、5、6年生が一緒に取り組めるように、常時活動の混合チームを作成するなど。）を考え、活動に取り組む姿勢が見られた。また、緑化活動（緑の羽根募金、緑のカーテン、次年度に向けてチューリップを植えるなど）に取り組むことは、全校児童の見本となるように動機付けがされたと考えられる。しかし、振り返りのアンケートでは、「活動内容の楽しさ」は全体の6割程度、「活動内容の頑張り」は全体の7割程度、「育てることの面白さ」は、全体の8割程度が有効的な回答結果を踏まえると、教師側の指導工夫も必要であることも考えられる。これらのことから、目標の「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。」に関して、実践は旧学習指導要領（平成20年告示）に基づくが、考察は現行の学習指導要領（平成29年告示）の観点で整理した。

今後の展望としては、この委員会活動（美化栽培委員会）を幼保小連携の視点で取り組むことができるのではないかとこの指導の提案を示していく。現行の学習指導要領（平成29年告示）解説（総則編）の「学校運営上の留意事項」において、「カリキュラム・マネジメントの実施と学校評価との関連付け」や「家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携」について明記されている。特に「学校相互間の連携や交流」において、「他の小学校や、幼稚園、認定こども園、保育所、中学校、高等学校、特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすること。」とある。そのような観点から、特別活動における高学年の児童会活動で、今回の美化栽培委員会の事例であれば、前期・後期の目標を立てる時に、地域社会との関わり方に関して、児童への指導を実践してみることである。なお、委員会活動では、児童が自治的に行うことが重要とされるため、教師の指導が主とならないように気をつける必要がある。例えば、小学1年生の入学時に、美化栽培で植えたチューリップが咲いて新入生を迎えること、小学1年生の生活科授業時に、幼保小連携で、地域の保育所、幼稚園、子ども園などの幼児と関わる際に、学校の緑と関わることの実例を紹介し、高学年が委員会活動を通して、学校相互間の連携や交流の内容に関して、共に尊重し合いながら協働し生活していく態度を育めるように指導を工夫することである。今回の緑の羽根募

金の活動で得た収入も、地域社会の緑化活動（環境活動）に活かされていることが挙げられる。そして、学校で育てた野菜、花の種などを、地域の保育所、幼稚園、子ども園、施設、家庭などに配布する機会を設けることによって、交流が期待されるだろう。そのような観点から、幼保小連携、地域社会・家庭との連携は、小学校の低学年だけではなく、高学年の特別活動（児童会活動）においても期待されるのではないだろうか。そのためにも、学校の地域にある保育所、幼稚園、子ども園にいる幼児と関わる機会を、教師側が設定する必要がある。小学校で育てた花の種や、ゴーヤ・ヘチマなどの野菜の種を地域社会に配布して、一緒に緑のカーテン作りなどに取り組むことも期待できる。今回の実践においても、常時活動（水やりなど）に参加できない児童が一定数いたことから、学校にいる人々だけでなく、新入生や地域の子供達（幼児）を始めとする、地域社会の人々にも緑豊かな学校であることを紹介できることを、教師が委員会の児童に伝えて、そのような気持ちを持って取り組めるように指導したり、声をかけたりすることも可能ではないだろうか。小学校低学年における生活科の授業以外にも高学年の特別活動において、幼保小連携の可能性は見出せると思われる。

本研究は、旧学習指導要領（平成20年告示）における実践を現行の学習指導要領（平成29年告示）に則って整理したものであるため、小学校で実施される特別活動（児童会活動）の取り組み方は、様々であると推察される。よって、各学校の特色や文化、地域社会との関わり方を工夫することで、幼保小連携の可能性は広がるのではないだろうか。また、美化栽培委員会だけではなく、他の委員会においても、高学年の委員会活動を指導する教員は、幼保小連携の視点を持って、児童を指導したり助言したりすることも重要になっていくと考えられる。

付記

本稿は、第8回科学教育シンポジウム兼第3回理数系教員養成拠点構築プログラム成果報告会および報告書（2015年3月）、大阪教育大学科学教育センター年報第8号別巻P80において発表した「小学校美化栽培委員会の実践—環境教育の視点から—」の内容と平成26年度大阪教弘教育研究論文「小学校における環境教育の一考察—美化栽培委員会の1年間を振り返って—」（奨励賞）の内容を基に、小学校学習指導要領（平成29年告示）や幼保小連携の視点を含めて再構築し、大幅に加筆修正したものである。

参考・引用文献

- 学校図書（2021）『みんなとまなぶ しょうがっこう せいかつ 上』
文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説（平成20年告示）』，東洋館出版社。
文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説（平成29年告示）』，東洋館出版社。
仲井勝巳（2015）「小学校美化栽培委員会の実践—環境教育の視点から—」，第8回科学教育シンポジウム兼第3回理数系教員養成拠点構築プログラム成果報告会および報告書，大阪教育大学科学教育センター年報，第8号，別巻，p. 80。
仲井勝巳（2014）「小学校における環境教育の一考察—美化栽培委員会の1年間を振り返って—」，平成26年度大阪教弘教育研究論文，奨励賞，p. 1-4（総ページ数）。

- 仲井勝巳（2023）「小学校特別活動における理科クラブの実践—安全・安心を意識して—」, 聖学院大学論叢, 第36巻, 第1号, p. 81-91.
- 佐野裕彦・岩立佳代美（1996）『園芸図鑑—花や野菜いっぱいの庭づくり—』, 福音館書店.
- 菅沼敬介（2022）「小学校入学までに幼児教育領域「環境」で経験させたい自然遊びに関する研究—幼保小の円滑な接続を目指す生活科教育の視点から—」, 福岡教育大学紀要, 第四分冊, 教職科編, 71, 125-137.
- 菅沼敬介（2021）「幼児教育の領域「環境」と小学校教育の「生活科」との円滑な接続カリキュラムに関する研究」, 福岡教育大学紀要, 第四分冊, 教職科編, 70, 53-64.
- 東京書籍（2021）『どきどきわくわく あたらしい せいかつ 上』

Environmental Education Efforts in Elementary School for Special and Committee Activities: Proposals for Instruction Indicating an Awareness of Cooperation between Kindergarten, Preschool, and Elementary School

Katsumi NAKAI

Abstract

This study implements special activities based on the old curriculum guidelines (announced in 2008). The environmental education efforts of the Children's Association's Beautification and Cultivation Committee were organized according to the current curriculum guidelines (announced in 2017), and a proposal was made intended to guide cooperation between preschools and elementary schools. Goals were set for each semester, and the children were constantly active. As a result, the children pursued both their own projects and group projects, such as deciding what kind of vegetables to plant, how to make the school and community greener, and how to solve the problem of non-participation in activities. Regarding the children's reflections, about 60% said they enjoyed the activities; about 70% said they worked hard at the activities; and about 80% said they found nurturing plants to be interesting. Despite some effective responses, it was noted that teachers needed to improve their teaching methods. The following is a proposal for teaching cooperation between preschool and elementary school in special activities for upper grades. As part of the Beautification and Cultivation Committee's activities, the school proposed distributing vegetable and flower seeds grown at the school to local nursery schools and kindergartens. It is also important to create opportunities for environmental activities and to be conscious of involvement with local children through regular activities.

Key words: Elementary School Special Activities, Committee Activities, Environmental Education, Kindergarten and Elementary School Cooperation, Teaching Suggestions